

Rational® Developer for System z
バージョン 8.0.1

RSE サーバー インストール・ ガイド

Linux on System z



Rational Developer for System z
バージョン 8.0.1

RSE サーバー インストール・ ガイド

Linux on System z



本書は、IBM Rational Developer for System z バージョン 8.0.1 (プログラム番号 5724-T07)、および、新しい版で明記されていない限り、これ以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： GC27-2810-01

Rational® Developer for System z

Version 8.0.1

RSE Server Installation Guide

Linux on System z

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

第2版第1刷 2010.10

© Copyright IBM Corporation 2000, 2010.

目次

第 1 章 Linux on System z ホストの必 要条件	1
Linux on System z ホストの前提条件	1
Linux on System z	1
SDK for Linux on System z, Java 2 Technology Edition	1
第 2 章 RSE サーバーのインストールおよ び構成	3
RSE サーバーのインストール、更新、およびアンイ ンストール	3
インストール	3

アンインストール	4
更新	5
RSE ディレクトリー構成	5
RSE サーバーの始動	5
例: サーバーの始動	6
RSE サーバーの SSL 構成	6
例: SSL を使用したサーバーの始動	7

IBM Rational Developer for System z の特記事項	9
--	----------

索引	13
-----------	-----------

第 1 章 Linux on System z ホストの必要条件

このセクションでリストされているすべての製品は、本書の発行時点で入手可能なものです。Developer for System z の関連機能をお使いになるときに、選択した IBM® 製品が引き続き入手可能かどうかを調べるには、IBM Software Support Lifecycle の Web サイト (<http://www.ibm.com/software/support/lifecycle/>) をご覧ください。

前提条件および相互必要条件の最新のリストは、「*Developer for System z 前提条件*」(SC88-4704) に記載されています。この資料は、IBM Rational Developer for System z Web サイトのライブラリー・ページ (<http://www.ibm.com/software/rational/products/developer/systemz/library/index.html>) で入手可能です。また、本書にリストされている要件よりも優先されます。

Linux on System z ホストの前提条件

Linux on System z

以下のいずれかのレベルがインストールされている必要があります。

製品名
Red Hat Linux® Enterprise Server 6 (s390x)
Red Hat Linux Enterprise Server 5 (s390x)
SUSE Linux Enterprise Server 11 (s390x)
SUSE Linux Enterprise Server 10 (s390x)

関連製品の Web サイトは次のとおりです。

<http://www-03.ibm.com/systems/z/os/linux/>

SDK for Linux on System z, Java 2 Technology Edition

Linux on System z® でリモート・システム・エクスプローラー (RSE) を使用するには、以下のいずれかのレベルがインストールされている必要があります。

プログラム番号	製品名
6207-001	IBM 64 ビット Runtime Environment for Linux on System z, Java™ 2 Technology Edition バージョン 6
6205-001	IBM 64 ビット Runtime Environment for Linux on System z, Java 2 Technology Edition バージョン 5

関連製品の Web サイトは次のとおりです。

<http://www.ibm.com/developerworks/java/jdk/linux/>

重要: 64 ビット・バージョンがサポートされます。

第 2 章 RSE サーバーのインストールおよび構成

Linux on System z では、IBM Rational Developer for System z を使用して以下の機能をサポートします。

- Linux on System z への RSE アクセス (SSL 接続を含む)
- RSE でのコマンド・シェルの使用 (vi または類似プログラムを除く)
- 完全なシェル・アクセスによる、ホスト・エミュレーターによる接続
- Linux on System z 上でのプログラムのコンパイル、リンク、および実行

現在、Linux on System z 用の z/OS® プロジェクトはありません。

RSE サーバーのインストール、更新、およびアンインストール

インストール

RSE サーバーは RSE の 1 つのバージョンであり、Developer for System z を使用して Linux on System z システム上のファイル・システムおよびコマンド・シェルにアクセスできます。

RSE サーバーのインストールは簡単で、インストール・マネージャーを使用します。

以下のステップに従って、RSE サーバーのインストールを完了します。

1. *IBM Rational Developer for System z RSE Server for AIX®、Linux、および Linux on System z インストール CD* から、インストール・ファイル `rdzrse80.tar` を、サーバーの書き込み可能ファイル・システム・ディレクトリー (`/tmp` を推奨) にコピーします。この CD に入っている 3 つのディレクトリー `AIX`、`Linux`、および `zLinux` には、各ターゲット OS に固有の `rdzrse80.tar` が含まれています。インストール対象システムの OS に合致するディレクトリーから、適切なファイルを選択します。
2. RSE サーバーのインストール・イメージを解凍します。

```
tar -xvf rdzrse80.tar
```
3. RSE サーバーのインストール、並びに更新のインストールやインストール済み製品の旧バージョンへのロールバックを行うには、インストール・マネージャーを使用します。インストール・マネージャーは、X Window システム・プログラムとして実行することも、またサイレント・インストール・モードでコマンド行から実行することもできます。X Windows® システムでインストール・マネージャーを実行する場合、コンソールを Linux on System z システム、または `DISPLAY` 変数のリダイレクト先である別のシステムで稼働している X Window システム・サーバーに接続する必要があります。root ユーザーとして実行中に RSE サーバーをインストールしてください。
 - ご使用のシステムにコンソールがない場合、または別のシステムに表示をリダイレクトする必要がある場合には、インストール・マネージャーを実行しているシステムに `DISPLAY` 変数を設定する必要があります。例えば、`ssh` を使用

していて、インストール・マネージャーを表示しているシステムのホスト名が `littlebox` である場合、Developer for System z RSE サーバーをインストールするシステム上で以下のコマンドを入力します。

```
setenv DISPLAY littlebox:0
```

Developer for System z RSE クライアントをインストールしているシステム上で X Window システムを始動します。littlebox 上のコマンド行ウィンドウで以下のコマンドを使用して、X Window システムが **RDzServer** からの表示ストリームを受け取れるようにします。

```
xhost +RDzServer
```

4. 解凍した tar ファイルのあるディレクトリーから **install** プログラムを実行し、X Window システムのインストール・マネージャーを実行します。X Window システムが利用不可の場合、`untar` された Developer for System z インストール・ファイルを含むディレクトリーから、サイレント・インストールを実行できます。デフォルトでは RSE サーバーは、`/opt/IBM/RDz80` ディレクトリーに置かれます。サイレント・インストールでデフォルト以外のディレクトリーにインストールする場合は、`install.xml` ファイルを編集し、行 `<profile installLocation="<desired install location>" id="IBM Rational Developer for System z"/>` を更新して、希望するディレクトリーを指定します。複数の RSE サーバー・インスタンスをシステムにインストールする場合は、インストールで新しい名前が使用されるように `id` 変数の値を変更し、`<profile installLocation="<desired install location>" id="IBM Rational Developer for System z_1"/>` のようにします。また、`id` の値に合わせて `profile` 変数を変更し、`<offering profile='IBM Rational Developer for System z_1' id='com.ibm.rational.rdz.rseserver.v80' version='8.0.0.2010'/>` のようにします。インストール・マネージャー・アプリケーションは、このような変更を自動的に行いますが、サイレント・インストールの場合は、これらの値を手動で変更する必要があります。サイレント・インストールを実行するには、以下のコマンドを実行します。

```
./install --launcher.ini ./silent-install.ini
```

- プログラム内のステップに従って、RSE サーバーをインストールします。デフォルトでは RSE サーバーは、`/opt/IBM/RDz80` にインストールされます。インストール・マネージャーは、以下のディレクトリーを作成します。
 - `/opt/IBM/RDz80`。このディレクトリーには、Developer for System z RSE サーバーが保持されます。
 - `/opt/IBM/InstallationManager`。製品をインストールしたプログラムのディレクトリーです。
 - `/var/ibm/InstallationManager`。このディレクトリーには、ログ、構成、ライセンスなどインストール・マネージャーが使用するさまざまなファイルが格納されます。

アンインストール

Developer for System z の RSE サーバーをアンインストールするには、`/opt/IBM/InstallationManager/eclipse` ディレクトリーの IBM インストール・マネージャーのランチャーを開始し、「**アンインストール**」ボタンをクリック

して、パネル上の指示に従います。サイレント・アンインストールの場合は、`/opt/IBM/InstallationManager/eclipse` ディレクトリーに移動して、以下を実行します。

```
./IBMIM --launcher.ini silent-install.ini -input <RSE install dir>  
/uninstall/uninstall.xml
```

ここで、インストール・パスは Developer for System z RSE サーバーがインストールされているディレクトリーです。デフォルトのインストール・ディレクトリーは `/opt/IBM/RDz80` です。

更新

Developer for System z RSE サーバーを更新するには、`/opt/IBM/InstallationManager/eclipse` ディレクトリーの IBM インストール・マネージャーのランチャーを開始します。「**ファイル->設定**」をクリックし、「**リポジトリの追加**」ボタンをクリックして、更新を含む場所をポイントします。リポジトリの追加後、IBM インストール・マネージャーのメイン画面で「**更新**」リンクをクリックして、パネル上の指示に従います。

RSE ディレクトリー構成

RSE サーバーのインストールが完了した後は、**root ユーザーのみが RSE を使用してシステムにログインできます**。他のユーザーが RSE を使用して Linux on System z システムにアクセスできるようにするには、Linux on System z システム管理者が `chmod` コマンドを使用してこのようなユーザーにも許可を与える必要があります。RSE インストールへのディレクトリー・パス、および RSE ディレクトリー内のファイルに対する読み取りおよび実行の許可が必要です。

RSE サーバーがデフォルト・ディレクトリー `/opt/IBM/RDz80` にインストールされた唯一の製品であるとした場合、以下のコマンドを実行すると、所有ユーザー `root` および `root` グループ内のすべてのユーザーが RSE サーバーに接続できます。

```
chmod -R ug+xr /opt/IBM/RDz80
```

`chmod -R ugo+xr /opt/IBM/RDz80` を使用すると、システム上のすべてのユーザーに RSE を使用する許可が与えられます。

RSE サーバーの始動

デフォルトのインストール・ディレクトリー `/opt/IBM/RDz80/bin` 内に、RSE サーバーを始動するための 2 つのスクリプトがあります。スクリプトの 1 つは Red Hat システムの実行用の `rsedaemon.RedHat.sh` で、もう 1 つは SuSe で使用するための `rsedaemon.SuSe.sh` です。以下のいずれかのコマンドを使用して RSE サーバーを始動します。

rsedaemon.RedHat.sh

RSE サーバーが始動し、デフォルトのポート 4035 で `listen` しています。

rsedaemon.RedHat.sh 3080

RSE サーバーが始動し、指定されたポート 3080 で `listen` しています。

rsedaemon.SuSe.sh

RSE サーバーが始動し、デフォルトのポート 4035 で `listen` しています。

```
rsedaemon.SuSe.sh 3080
```

RSE サーバーが始動し、指定されたポート 3080 で listen しています。

例: サーバーの始動

システムで RSE サーバーが正常に始動すると、起動スクリプトで 사용되는構成情報がモニターに表示されます。この情報は画面を下にスクロールし、以下の例のような内容です。

```
rsedaemon.RedHat.sh
...
java version "1.6.0"
Java(TM) SE Runtime Environment (build pxz6460sr5-20090529_04(SR5))
IBM J9 VM (build 2.4, J2RE 1.6.0 IBM J9 2.4 Linux s390x-64
      jvmxz6460sr5-20090519_35743 (JIT enabled, AOT enabled)
J9VM - 20090519_035743_BHdSMr
JIT - r9_20090518_2017
GC - 20090417_AA)
JCL - 20090529_01

FEK001I RseDaemon being initialized
FEK010I (rsed.envvars location = /opt/IBM/RDz80/bin/)
FEK011I (log directory = ../../log/)
java version "1.6.0"
Java(TM) SE Runtime Environment (build pxz6460sr5-20090529_04(SR5))
IBM J9 VM (build 2.4, J2RE 1.6.0 IBM J9 2.4 Linux s390x-64
      jvmxz6460sr5-20090519_35743 (JIT enabled, AOT enabled)
J9VM - 20090519_035743_BHdSMr
JIT - r9_20090518_2017
GC - 20090417_AA)
JCL - 20090529_01

FEK002I RseDaemon started. (port=4035)
Server Started Successfully
```

RSE サーバーの SSL 構成

SSL は、Developer for System z と Linux on System z システムとの間の通信を保護するために使用できます。この保護は、Java 鍵ストア・ファイルを作成し、この JKS ファイルを指すように RSE ssl.properties ファイルを設定することによって行います。RSE サーバーが起動すると、プロパティー・ファイルが読み取られ、Developer for System z との接続が SSL によって保護されます。

RSE で SSL を使用可能にするために ssl.properties ファイルが使用されるようになってからは、インストールでシステム管理者が通信を保護する、または保護しないように設定できるようになりました。同じ RSE ディレクトリーから保護する場合と保護しない場合を両方設定することはできません。保護するポートと保護しないポートが必要な場合、2 台目の RSE サーバーをインストールする必要があります。このためには、インストール・マネージャーを再実行し、新しいインストール・ディレクトリー (例えば /opt/IBM/RDz80SSL) を指定します。

新しいディレクトリー内の ssl.properties ファイルを、<RDz Install Path>/bin ディレクトリー内の Java 鍵ストア・ファイルを参照するように変更します。これで、RSE サーバーを別のポート 4077 で始動し、通信を SSL で保護することができます。

```
rsedaemon.RedHat.sh 4077
```

/opt/IBM/RDz80SSL ディレクトリーに作成された RDZRSE.jks という名前の Java 鍵ストア・ファイルと、パスワード RDzisGreat を使用して、ssl.properties ファイルを編集し、以下のスタンザを変更します。

注: JKS ファイルへのパスを daemon_keystore_file パラメーターに指定する必要があります。

```
#
daemon_keystore_file=/opt/IBM/RDz80SSL/RDZRSE.jks
daemon_keystore_password=RDzisGreat
#
```

SSL 認証を使用可能にするには、ssl.properties ファイルにある enable_ssl と disable_server_ssl の 2 つのスタンザを以下のように変更します。

```
enable_ssl=true
disable_server_ssl=false
```

例: SSL を使用したサーバーの始動

ホスト名が RDzServer のシステムで SSL を使用して RSE サーバーが正常に始動し、接続が確立されると、画面に以下の例のような内容が表示されます。

```
rsedaemon.RedHat.sh 4077
SSL Settings
[daemon keystore:          /opt/IBM/RDz80SSL/rdzrse.jks]
[daemon keystore pw:      RDzisGreat]
[server keystore:         /opt/IBM/RDz80SSL/rdzrse.jks]
[server keystore pw:      RDzisGreat]
Daemon running on:        RDzServer.rtp.raleigh.ibm.com, port: 4077
```

IBM Rational Developer for System z の特記事項

?? Copyright IBM Corporation 2009

プログラミング・インターフェース: プログラムを作成するユーザーが Rational Developer for System z のサービスを使用するためのプログラミング・インターフェースがあります。

実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒242-8502

神奈川県大和市下鶴間1623番14号

日本アイ・ビー・エム株式会社

法務・知的財産

知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

*Intellectual Property Dept. for Rational Software
IBM Corporation
20 Maguire Road
Lexington, Massachusetts 02421-3112
U.S.A.*

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で 사용할 수 있지만, 有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書はプランニング目的としてのみ記述されています。記述内容は製品が使用可能になる前に変更になる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。サンプル・プログラムは、現存するままの状態を提供され、いかなる保証条件も適用されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

?? (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。 ?? Copyright IBM Corp. _年を入れる.

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標

IBM、IBM ロゴ、および ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

Adobe、Adobe ロゴ、PostScript、PostScript ロゴは、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Intel および Pentium は、Intel Corporation または子会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Microsoft、Windows、および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

インストール 3

[カ行]

構成 3

ディレクトリー 5

SSL 6

[サ行]

サーバー

始動 5, 7

SSL 7

サーバーの始動 7

始動、サーバー 5

前提条件

Linux on System z 1

[タ行]

ディレクトリー構成 5

L

Linux on System z

前提条件 1

S

SSL

構成 6

サーバー 7



プログラム番号: 5724-T07

Printed in Japan

GC88-8150-01



日本アイ・ビー・エム株式会社

〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21